

# 市中心部に震災メモリアル拠点を —第1回検討委員会を開催しました

◀委員会では、各委員の専門分野の視点から、さまざまな意見が出されました

平成26年12月に仙台市震災復興メモリアル等検討委員会では、東日本大震災の経験を継承するため、沿岸部と中心部それぞれに、震災に関するメモリアル拠点を整備することが望ましいとする提言をまとめました。これを受け、市では平成27年度に沿岸部の拠点として若林区荒井に「せんだい3・11メモリアル交流館」を開館。その後、市中心部の拠点についても検討を進めています。

1月30日には、新たに設置した中心部震災メモリアル拠点検討委



▶せんだい3.11メモリアル交流館



員会の第1回会議を開催しました。新たな検討委員会は、研究者や専門家など有識者10人で構成。2020年度までに、中心部メモリアル拠点の基本的な方向性を示す基本構想の策定を目指します。

初会合では、今後のメモリアル拠点の在り方について、「東北の被災地の中心的な都市である仙台の役割を果たせる拠点に」「過去の震災を伝えるだけでなく、今後起こる災害と共に生きるために必要なことを発信できれば」などの意見が出されました。また野家啓一委員長は「つくって終わりでなく、持続的な活動・交流の場にしていきたい」と話しました。

## 市政トピックス

### 若き音楽家の競演— 仙台国際音楽コンクールの出場者が決定

世界的にも珍しい、協奏曲を課題曲の中心に据える仙台国際音楽コンクール。若い音楽家の育成や、国際的文化交流の推進等を目的に平成13年から3年に1度開催されています。ピアノとバイオリンの2部門で、10代から20代の出場者

## 市政トピックス

### 札幌市水道局と人事 交流に関する協定を 締結

1月25日、仙台市水道局は札幌市水道局と、「災害時相互応援強化に係る人事交流に関する協定」



▶仙台市水道局本庁舎で行われた協定締結式



▶コンクールでは、仙台フィルハーモニー管弦楽団との協奏曲も披露されます

による熱演を、世界的に著名な音楽家が厳正に審査します。

第7回となる今大会では、39の国と地域から467人の申し込みがありました。書類や動画による予備審査の結果、ピアノ部門43人、バイオリン部門41人、計84人が本選への出場権を手に入れました。

ピアノ部門は5月25日(土)、バイオリン部門は6月15日(土)から予選、セミファイナル、ファイナルが行われます。また、コンクール期間中、審査委員によるマスタークラスや、出場者によるミニコンサートなども開催します。

## 市政トピックス

### スポーツで活躍した 個人・団体を表彰

2月5日、「仙台市スポーツ賞」の表彰式を開催しました。これは、昨年1年間にアマチュアスポーツの分野で優秀な成績を収めた方や、本市のスポーツ振興に貢献された方に贈られるものです。

大賞は、団体の部では、天皇杯第46回日本車いすバスケットボール選手権大会において、大会10連覇を達成した宮城MAXが受賞。個人の部では、ITTFワールドツアーグランドファイナルで史上最年少優勝を果たした、卓球の張本智和選手が受賞しました。

宮城MAXの豊島英選手は「この賞に恥じないよう精進していきます」とあいさつ。ITTFジュニアサーキット・中国大会で優勝し、個人の部で栄光賞を受賞した卓球の張本美和選手は「世界を代表する選手になりたい」と今後の



▲張本美和選手



▼豊島英選手

## 市政トピックス

### 貴重な文化財を地域の 力で守る—文化財 防火デー

抱負を語りました。このほか、栄光賞、優秀賞、奨励賞、功労賞を全83組に贈呈しました。

1月26日の文化財防火デーは、昭和24年に奈良県の法隆寺金堂の壁画が、火災で焼失したことにより制定されました。毎年この日を中心に、全国で消防訓練等の文化財火災予防運動が行われています。



▲賀茂神社での消防訓練

仙台市内でも、大崎八幡宮や賀茂神社など11カ所で消防訓練を実施。町内会や婦人防火クラブの皆さんが参加し、通報訓練、文化財等の搬出訓練などを行いました。水消火器と水バケツリレーによる初期消火訓練では、参加者同士で声を掛け合う姿も見られました。

地域の貴重な財産を後世に残せるよう、火災時の対応について、地域全体で確認する一日となりました。

## 3.11 震災文庫を 読む

東日本大震災を語り継ぐための市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりの本を、紹介します。

「コミュニティ・アーカイブをつくらう！」



佐藤知久・甲斐賢治・北野央／著 晶文社 刊

「あわいゆくころ—陸前高田、震災後を生きる」



瀬尾夏美／著 晶文社 刊

震災後すぐに、せんだいメディアテークのスタッフが、震災と復興を映像で記録する市民の活動を応援しようと、『3がつ11にちをわすれないためにセンター』を立ち上げました。将来の世代が思いがけない困難に直面したときに、官製の、あるいは報道機関による公式の記録とはちがう次元で、こんな苦労や戸惑い、そしてこんな取り組みがあったんですよと伝えるために、です。これは、IT環境に流されるのではなく、デジタルカメラやスマホを鉛筆のように使える、そんな市民としての地力を育むためでありました。これは「おまかせ」から「ひきうけ」への市民の活動の転回を示す出来事でもありました。

●紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・1585